

説教 「道をそれて、呼びかけられた」

聖書 出エジプト記 3:1~6/ヨハネの手紙一 4:10~12

「いまだかつて神を見た者はいない。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされている(1ヨハネ 4:12)」。

神を見た者は「いまだかつていない」のか。昔も今も、幻視者や霊媒体質の人はいて、「神を見た」という人は案外多い。だがそんなカミサマは、言葉や理解に納まる人間よりも小さい神。

キリスト教でも、神を縮小して納得することがある。偶像崇拜とは他宗教に対するものではなく、手前味噌なキリスト信仰への自戒。

モーセが見たものも神それ自体ではない。「彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない(出エジプト 3:2b)」。「燃え尽きない柴」、これは神のイメージだ。

神は、超然とおられる方ではない。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である(3:6)」と語りかけ、人間と共に生きて働かれた歴史を示す。それも「この身」に係る父祖と共に在った。

八ヶ岳伝道所の開拓伝道を始めた時、幾人かの者に無謀だと親切心で言われ、幾人かの者に「伝道それ自体は尊いのだが」と冷やかに言われた。それで私はどう思ったか。

助言はまるで耳に入らず、羊の群を牧する(3:1)具体的な方策より、「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう(3:3)」という無手勝な好奇心が勝っていた。

モーセに比するのはおこがましいが、私は「道をそれて」不思議を見つめた。しかし、それた道が開かれる見通しはなかった。

「主は、モーセが道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、[モーセよ、モーセよ]と言われた(3:4)」。モーセも私も「道をそれた」。

道をそれた私は見つけられ、神の方から声をかけてくれた。私が「はい(3:4)」と答えると、一緒に「はい」と答えた幾匹かの羊がいるではないか。驚いた、でも当然だ。

ここへたどり着いたのは、小さな羊の群に導かれてのこと(3:1)。不思議を見届けようと(3:3)、道からそれた私たちの群を、神が見つけて呼びかけて下さったのだ(3:4)。

「いまだかつて神を見た者はいない(1ヨハネ 4:12)」。それでいい。私たちには見えなくても、神が私たちを見ておられる。見えないまま「声をかけられている」真実だけでもう十二分。

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛した(4:10a)」。それゆえの十字架の痛ましきは、愛の深さだった(4:10b)。

神は「見えない」、「分からない」。だが「わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされている(4:12b)」。

「愛し合うならば」という条件つきで、神がとどまって下さるのではない。「神の愛がわたしたちの内ですべて全うされている」がゆえに、私たちは愛しうるのだ。

「互いに愛し合うべき(4:11)」も律法としてではなく、「互いに愛し合いうる」ことの言い換え。

神の主体性たる愛が、私たちの主体となる不思議。神は見えないが、身体としての教会(1コリント 12:27)で愛を感じ、神の愛を具体的に知る(12:26)。

私たちは自己に拘泥し、自らが神の身体であることを忘れがち。神の呼びかけに「はい」と同時に答えて(出エジプト 3:4)、一つの身体であると気づかされる。燃え尽きぬ柴の、永遠の御手によって(3:2)。



《おまけのひとこ》

自分のことは自分が一番よく知っている という言葉には居直った自己愛がある どうせなら神に愛されているあなたも見つけてほしい するとどうだろう 他者を愛しうる自分に驚いたりする